

## 2022 年度秋季大会（神戸大学）の記録

神戸大学 藤原賢哉

2022 年度秋季大会は、2022 年 11 月 26 日、27 日に、それぞれ完全オンライン形式、ハイブリッド形式で開催された。神戸大学が開催校となるのは、2010 年秋季大会以来 12 年ぶりであり、2022 年は、神戸大学創立 120 周年にもあたるため、特別講演の一部は、創立 120 周年の記念事業として行われた。

初日は、自由論題（10 セッション）、金融史、国際金融、中央銀行の各パネルセッション、日本証券業協会の特別セッション、そして、アダム・ポーゼン氏（ピーターソン国際経済研究所所長）による特別講演 I が完全オンラインで実施された。自由論題では、マクロ経済、金融政策、国際金融、金融仲介機関、フィンテックなどのテーマに加えて、2 つの英語セッションが設けられ、合計 30 本の研究報告が行われた。金融史パネルでは、戦時国債管理における日銀と預金部の役割に関して討議が行われ、国際金融パネルでは、資源価格高騰、海外インフレ、円安等が日本経済に及ぼす影響について研究報告及び討論が行われた。中央銀行パネルでは、地域金融機関の機能強化やそのために求められる中央銀行の役割について活発な議論が展開された。特別講演 I では、「No exit? Monetary aspects of the G7 post-Covid recoveries」というタイトルで、日米英欧のコロナ危機からの回復の特徴について各国の経済構造の違いに触れながら講演が行われた。

二日目の午前中は、福田慎一会長（東京大学）による会長講演、午後は、雨宮正佳氏（日本銀行副総裁）による特別講演 II と共通論題が、ハイブリッド形式で実施された（対面会場は神戸大学出光佐三記念六甲台講堂）。会長講演では、「パンデミック下の為替レートの動向」というタイトルで、パンデミック下の円レートの特異な動きに関して講演が行われた。特別講演 II では、「気候変動と金融」というタイトルで、気候変動と金融の関連性、民間金融機関や各国中央銀行の取り組み、今後の課題等について講演が行われた。この特別講演は、神戸大学創立 120 周年記念事業の一環として開催され、学会員だけではなく、神戸大学の卒業生・在学生、元・現教職員も多数参加した。共通論題では、「オルタナティブデータの未来：可能性と課題」と題し、近年のデジタル化の進展に伴い、官庁統計とは異なり、民間等が収集・作成するいわゆる「オルタナティブデータ」に焦点をあて、実務家（辻中仁士氏（株式会社ナウキャスト）、瀧俊雄氏（株式会社マネーフォワード）、東海林正賢氏（（一社）オルタナティブデータ推進協議会））、政策当局（長野哲平氏（日本銀行）、学術研究者（渡辺努氏（東京大学））、それぞれの立場から、利活用の実例、既存の官庁統計との関係（代替・補完）、課題（プライバシー保護や人材育成等）について議論が行われた。

大会の運営に関しては、開催校側のスタッフとして、過去に経験があるものの、大会責任者としては初めてであり、いくつかの不安もあった。オンライン開催には、物理的な移動を伴わずに発表・参加できるというメリットがある一方で、対面での独特の緊張感や会員同士

の交流機会が減るといった懸念もあった。いろいろと考えた結果、2022年の春季大会と同様に、初日を完全オンライン、二日目をハイブリッド形式で開催することとした。初日のオンライン開催は、コロナ禍3年目という背景もあり、準備・当日の運営は比較的スムーズであったように思われるが、二日目のハイブリッド開催に関しては、予想以上に神経を使うこととなった。特に、特別講演Ⅱは、神戸大学120周年記念事業の一環として開催され、学会員以外の方の参加者のための受付や、特別講演後の会場設営のし直しなど追加の作業が必要であった。オンラインの配信のタイミングに合わせた分単位での作業が多く、大会準備関係者は、何度も事前に確認を行いながら当日を迎えた。幸いにも、本大会に関しては、プログラム委員長が同じ大学の宮尾龍蔵氏であり、大会の運営に関していろいろと協力していただいた。特に、2つの特別講演に関しては、宮尾氏に負うところが大きい。今回、無事に大会を開催できたことに対して、参加者・関係者の皆様に改めて感謝の意を表したい。

(宮尾龍蔵「学会だより」『月刊金融ジャーナル』2023年1月号,pp104-105より引用)

文責：藤原賢哉（神戸大学、大会準備委員会委員長）

